

『道化 (07/01)』

満天の星を観客にして
道化が一人
野原で腕を広げスキップしている

傷んだ己を労るように
野原の舞台で踊っています
痛む胸を安らむように
野原で両手を広げ踊っています

月が雲間より煌々と
舞台を照らし
星が宝石のように輝いています
まるで道化の涙を知っているように

満天の星を観客にして
道化が一人
野原で両腕を広げスキップしている

『道化 (07/02)』

ドーランを落とす道化は
鏡に写る
自分の涙を見ていた
こすってもこすっても
溢れでる涙
拭いても拭いても落ちる涙
鏡を見ながら
道化の両手は震えていた

声を殺して
道化は一人泣いた
天幕の中で
道化は一人泣いていた

眼に映っているのは
生きるのに萎えている自分
耳に聞こえてくるのは
多くの人々の笑い声

化粧を落とす道化は
鏡に写っている

自分を見ていた
明日に勇気を持つとうと
心に言い聞かせてみた
今日の喜んだお客の顔々を
目に浮かべ思い出しながら
道化は両手を固く結んでいた

『道化 (07/03)』

月の明かりの中で
道化が一人踊っています
両腕を広げて
ススイーッと走って
指を鳴らし止まる
今度は逆の方へ
ツツイーッと走って
指を鳴らして止まる

寝静まった深閑の野原は
満天の星空
無言でキラキラと輝く星

月が煌々と道化を照らし
彼は涙を流している
拭き終わった彼は

キーンキーンという
星空の響きの下で
彼は両腕を広げると
ススイーッと走って
指を鳴らし止まる
今度は逆の方へ
ツツイーって走って
指を鳴らして止まる

『道化 (07/05)』

天幕の中で道化は
千の心の笑いの中にいた
千の心を一つの笑いへと
円い舞台で演じていた

緊迫した綱渡りも
恐怖を感じた
空中ブランコも終わり

千の心は笑いへと興じていた

道化の瞳には
天幕を透して星空の向こうで
キラキラ輝いている
星を見ていた

千の心の誰もが笑いこけている
一人一人にお辞儀しながら
道化の涙には
満天の星が小さく映っていた

『道化 (07/08)』

村にサーカスが来ました
ライオンや象や馬がいました
犬も虎もおりました
町の野原はいくつもの天幕が張られま
した
音楽がいつも鳴っていました

美しい女の人たちが
沢山いて
村はいつもより明るくなりました

でも私が好きだったのは
道化のおじさんです
いつも知らない町の話
山の向こうの
空の向こうに有る沢山の町の話
話してくれました

.....
.....

私が大人になって
遠い町で働いていたとき
道化のおじさんに
出会いました

年老いて淋しそうでした
黙って私の積もる話を
聴いていました

道化のおじさんが亡くなったのを
彫りが深く瞳が大きい
背が高く大きいつばの帽子を
冠った女の人から聞きました
父の遺言ですから
手に持ったハーモニカを
私に預けて行きました

森の中で
ハーモニカを頭に置いて
眠っていると
いつも小鳥がやって来て
囀るのです

村にサーカスが来て
道化の男にハーモニカを帰しました
円い舞台の中で
彼はハーモニカを取り出して吹きまし
た
千の心が一つになって
天幕の中は笑いの渦でした

『道化 (07/09)』

天幕の中で
道化は演じていた
千の人生を一の笑いへと
一心に願って

自分の人生を
道化は語っていた
空を切り
一回転し
道化はいつしか
千の心へと
自分を溶かしていた

人間でいることが
一生の仕事で有ることを

千の笑いが響き渡り
道化が空を一回転し
途方にくれている

生きている限り
人間を逃げられないことを

一人一人の人生には
物語が有ることを
空を切り
一回転し
道化はいつしか
千の人生へと
自分を溶かしていた

天幕の中で
道化は演じていた
千の人生を一の笑いへと
一心に願って

『道化 (07/12)』

男の影が
待合室の壁に
写っている

白い壁に
長く黒く落とし

裸電球が
旅人の人生と
ひそひそと
話をしている

真夜中の闇が
じっと聞き耳を立て
風が話をなぞっている

列車が停止し
降りる客と交差しながら
一団が乗って

待合室は
裸電球にじっと照らされて
風に微かに揺れている

『夜空』(07/13)』

七月のどんより空は
星空を見せてくれません
きつと人間に
意地悪しているのでしょうか

悲しんでいる人もいるのにね
淋しい人もいるのにね
耐えている人もいるのにね
悩んでいる人もいるのにね

人間でなくたって
生き物は沢山いて生きているのに
木だって草だって
花だって大地の上で育っているのに

キラキラ煌めいている
沢山のダイヤモンドやエメラルドが
瞬く天空の星を
どうして隠すのでしょうか

『道化』(07/13)』

仮面を付けた道化が二人
野原に現れて乱舞している
キーンキーンと言う宇宙の
響きをリズムに
二人の道化が踊っています

ゆっくりと速く
速くゆっくりと
リズムは止まることなく
穏やかにと

背を合わせたと思ったら
互いに離れて
近づいたと思ったら
互いに遠く離れて

赤く青く星座は輝き
利休鼠の天空は眩いて
そ知らぬ様に包み込んで
キーンキーンと響きを発している

仮面を付けた道化が二人
野原で舞っています
互いに近づき遠く離れ
満天の星空の下で
舞台狭しと踊っています

『道化 (07/16)』

道化は 生きる
哀れさを知っている
道化は 生きる
悲しみも知っている
道化は 生きる
虚しさを知っている

道化は人の
一生を見ている
人とともに生まれ
人とともに歩き
生命の嘆きを
共に耐え忍んでいる

道化はいつだって
あなたとともにいる
ときおり先を歩き
後を歩いたり
傍に長く延びたり
あなたと共に歩いている

道化に逢いたかったら
鏡を覗いてご覧なさい
道化に遭いたかったら
あなたの影を作ってご覧なさい
道化に遇いたかったら
満天星空の大地に立ってください

道化は 生きる
虚しさも知っている
道化は 生きる
悲しみを知っている
道化は 生きる
哀れさも知っている

『道化 (07/21)』

村の踊りを見ている
年に一度の村の祭りを見ている
ドランを落として見知らぬ人として
綿飴や焼きそばや
ボンボンやお面や
屋台出店の通りを歩いている

人の喜びを感じとりながら
笛や太鼓の響きの中を歩いています
人が憩う心を感じとりながら
年に一度の祭り日歩いています
綿飴を買って焼きそばを食べて
金魚掬いをして
屋台出店の中を歩いています

道化が踊りを見ている
年に一度の祭りを見ている
祭囃子の響きの中を歩いている
買ったお面をつけて
人々の笑いの中を鋭く歩いている
道化が祭り日の中を歩いていく

『電車 (07/21)』

電車が田畑の中を走っている
電車が雑木林の中を走っている
二本のレールの上を
走っている走っている
二本のレールの上を
走っていく走っていく
沢山の客を乗せて
一人一人の人生を乗せて
電車が田畑の中を進んでいく
二本のレールの上を
電車が雑木林の中を進んでいく
二本のレールの上を
一人一人の人生を乗せて
沢山の客を乗せて
進んでいく進んでいく
二本のレールの上を
進んでいる進んでいる
二本のレールの上を
電車が雑木林の中を進んでいく
電車が田畑の中を進んでいく

『道化 (07/26)』

生きている音に合わせて
生きているリズムに合わせて
お面をかぶった道化が
村の祭り日の中を踊っています

ゆっくりと
激しくと
静止したかと思うと
突然動いたり

祭囃子に
道化が踊っています
音に合わせて
リズムに合わせて

突然止まったかと思うと
狂ったように動いたり
ゆっくりと
激しくと

『永久 (07/26)』

生きている音に合わせて
生きているリズムに合わせて
お面をかぶった道化が
村の祭り日の中を踊っています

ようやく人間は
永久の命の一步に近づいた
もう私たちは死ぬことも無くなる
老化した年齢は
閉じた細胞を初期化して
赤ちゃんからやり直しが出来る

人類の夢がもう少しで
実現するのだ
がその文明を饗宴出来るのは
限られた文明社会である
文明と文明のサバイバルな戦争が
未来の社会では待っている

勝ち残った文明だけが
永久の命を饗宴できるだ

生き抜いた文明だけが
死ぬことのない社会を作るのだ
その文明だけが
宇宙の神秘へ辿り着けるのだ

『窓 (07/28)』

ほんとうに生きたいのです
どうしても生きたいのです
病室のベットに横たわりながら
無性に葛藤するのですよ

確かに文学は
生の苦しさや心の悩み
日々人生は戦争と平和だと
指摘されますが

それでも私は生きたいのです
たぶん死ぬのが怖いからでしょう
死を待っているって
何だがこぼれるほど哀しいですよ

苦痛が波間の安住の日々
切実に生きたいと思うのです
たぶん死ぬのが怖いからでしょう
死の世界を知らないからでしょう

『窓(二) (07/28)』

窓を開けると
蝉の泣き声が聞こえてきます
車の通る音や
電車の走っている音や
通りのざわざわ音が響いてきます

蝉の声や犬の吠え声や
小鳥の囀りの音が美しく聞こえるので
す
ベットで横になってみると
いろんな音が聞こえてきます
人の別れの音もね

窓の外は自由なんですね
ほんとうにね
看護婦さんやいろんな人に迷惑かけて

今日も私は生かされています
もう自分である戦いに疲れそうです

窓の外から
蝉の鳴き響きが聞こえています
泣くことすら忘れそうな私に
人で有ることを教えてくれます
さよならと言っているようです

End all 1997/07